

2019年度Sセメスター キャンパスアジアプログラム 報告書

2019年7月

教養学部学際科学科地理・空間コース4年 羽田野太貴

はじめに

この度、私は2019年2月から6月の約4ヶ月（1学期）間、キャンパス・アジアプログラムにて中国・北京大学に留学をしました。本報告書では、私個人のプロフィールから北京大学での授業、生活、また留学を通じて感じたことについて可能な限り記述しております。特に、自分自身が今回の留学を決断する際、中国留学に関する情報収集に大変苦労した経緯があったことから、今回私を派遣頂いたお礼も兼ね、少しでも東大に何か還元をしたい思いを持って書きました。本報告書を読んだ一人でも多くの方が、「中国に行きたい（あるいは留学したい）」と思ったのならば一個人として大変嬉しく思います。

I 留学に関する基礎情報

1. 私個人について

自分は2016年4月に文科Ⅲ類に入学をし、2018年4月に後期教養の学際科学科地理・空間コースに進学をしました。留学開始前は3Aセメスターがちょうど終了した状態で、既に卒業研究以外に学部卒業に必要な単位は取得した状態で北京大学に行きました。すなわち、実質4Sセメスターの間に留学をしたこととなります。なお、将来の進路としては学部卒業での就職を予定していますが、今回の留学による卒業時期の延長などは考えていません。私自身、特殊な就職活動をしたこともあって留学による就活への影響はほとんどありませんでしたが、一般的な状況も含めて留学と就活の両立に関する話を後述できればと思います。

2. 留学に至った経緯

今回、キャンパス・アジアのプログラムを通じての北京大学への留学を思い立った理由は、主に3つありました。

第一には、東大入学以後第二外国語として中国語を選択し、後期課程でも中国語の授業を継続して履修していた以上、何らかの“形”としてその成果を確かめ、そして残したかったということがあります。

また第二に、2018年7～8月の学部3年生の夏休みに、本部国際交流課が主催するインドネシア大学サマープログラム（約2週間）に参加をしたことです。具体的には、そこで中国・雲南大学から来た学生達とグループワークに取り組んだことが自分にとって大変な刺激となりました。彼ら彼女らの論理的な思考力の高さや主張の強さを身をもって感じたことで、「もう一度中国の同年代の学生達と肩を並べて勉強したい!」と思ったのです。結果的に振り返れば、北京大学に留学したことはこの目的を達成するための手段として本当に最適だったと感じています。

そして、最後の理由は将来の進路を見据えてのことです。それに関連して、人文科学を学習している人の間ではよく話題になる問いがあります。それは、当時世界のGDPの約3割を清朝が握っていたことから18世紀はアジアの時代、英国に代表されるように産業革命以後各国が急成長を遂げたことから19世紀はヨーロッパの時代、二度の大戦とその後の冷戦を経て覇権を握っていったことから20世紀はアメリカの時代、では21世紀は？というものです。世界の中心が1世紀ごとに地球を西回りに転換している、といった論調を踏まえれば、2030年頃に（現在の経済成長水準を保てば）再び世界最大の経済大国となる中国を含めた、東アジアの中心性を考えざるを得ません。将来、行政官として我が国の国家政策に、外交官として日本の外交政策（特に東アジア外交）に携わりたいと思っていた私にとってみれば、“一衣帯水にありながら宇宙よりも遠いかもしれないぐらいに人々の思考や生活習慣も異なる”中国という国を少しでも早い段階で内部から眺めるのは至上命題のことと考えていました。

3. プログラムへの応募から選考結果通知まで

次に、プログラム応募から渡航までの流れを詳述したいと思います。前置きとして、本部国際交流課の募集するUSTEPとは異なり、キャンパス・アジアプログラムはS・Aセメスターそれぞれで募集がかかるので、Aセメスターでの留学を検討している方はそちらで留学をされた方々の報告書を参照された方が良いでしょう。お伝えしておきます。

キャンパス・アジアのHPに2019年度Sセメスター留学の募集が告知されたのは、2018年9月上旬頃でした。ただし、私は応募開始～終了時まで海外旅行をしており、初回の募集での応募は諦め、追加募集がかかれば応募するというスタンスをとっていました。その時は偶々初応募者が少なかったため、追加募集がありましたが、2019年度Aセメスター留学者選考の際は追加募集がかからなかったようなので、ちゃんと初回募集に応募した方が確実でしょう。募集時に提出するものは、簡単な申込フォーム、英語の志望理由書、語学の資格書類でした。英語の志望理由書については、例えば前節に私が書いたような内容をワープロでA4、2～3枚程度に書けば十分です。語学の資格書類については

あれば提出という要求ですが、もちろんあるに越したことはない（加点材料にはなる）ので、英語（TOEFL もしくは IELTS）は最低限で、可能な限り（北京大学なら）中国語（HSK）も事前にスコアを持っておくべきです。参考までに、自分は IELTS、HSK（5 級）のスコアを提出しました。

9 月下旬に追加募集での書類提出を行い、その後すぐに面接選考の案内がきました。そして 10 月上旬に、EALAI の事務局の方を含め 4～5 人ほどの面接官と面接を行いました。基本は日本語で行われ、語学力の確認のために英語で 1 問、中国語で 1 問それぞれ質問を受けました。しかし、後で他のプログラムメンバーに確認したところ、中国語での質問はされなかった人もいた上に、正直な話自分でもその質問に上手く答えられた感触はなかったもので、どちらかと言うと語学力の高さよりは志望動機をしっかりと訴えつつ留学に対する熱意を示すのが大事な気がします。

その後、10 月下旬に選考結果の通知があり、既に 2018 年度 A セメスターから 1 年間の留学をしている 1 名に加えて、自分を含め 4 名のメンバーが 2019 年度 S セメスターから新しく北京大学で学ぶことが決定しました。なお、新しく加わった 4 人の留学期間の内訳は、半年（1 学期）が 2 名、一年が 2 名でした。ここまでの決定の早さは、USTEP に比べればとてもスムーズだと思います。

4. 渡航までの諸手続および奨学金申請

選考結果通知から直ぐにメンバーの顔合わせがあり、北京大学への留学申込や中国政府奨学金の申請に関する説明も同時に行われました。この辺の手続きは全て各個人の責任で行うことになるので、与えられた要項をよく読んで期日までにしっかり対応していきましょう。なお、北京大学、中国政府奨学金それぞれの申請過程において健康診断結果の英語診断書を求められました。それぞれの締切が 11 月中旬と、選考結果の通知から比較的早いので、（英語診断書の発行までに時間がかかる関係上）選考結果の通知を受けたら速やかに受診に行った方が良いです。自分はギリギリに健診を受け、診断書の受け取りが締切当日となって非常に焦りました。

さらに、同時期に東大の「短期留学奨学金」の申請手続きも行われるので、受給を希望する人はこちらへの書類提出も忘れないようにしましょう。生活費関連の項目にて基本的な生活費の目安を様々書きますが、中国政府の奨学金では 3000 元/月、さらに東大の奨学金では 6 万円/月を受給できるので、諸費用を自弁せずに留学することも十分可能です。

渡航前最後の手続きは、留学ビザの発給です。概ね 12 月下旬頃に北京大学から入学許可証が届くので、それを持参した上で、神谷町にある中国ビザセンターに向かいます。申請から発給までに 1 週間程度要し、その間はパスポートが手元にない状態なので、年末年

始に海外旅行等の予定は入れない方が賢明でしょう。半年の場合は X2 と呼ばれる 180 日以内の留学専用のビザを申請します。就労ビザではないので、原則的に向こうでアルバイトを行うことは難しいと思います。もっと言えば、奨学金の額が十分すぎるので余程の豪遊をしない限り金欠には陥らないはずです。申請料金は 8000～9000 円で、中国本土から 1 回でも出国すると失効します。ただし、中国到着後、現地において大学の事務局ならびに公安局を通じ出入国回数を増やす（2 回にする）ことが可能です。詳細はビザセンターの HP あるいは入学許可証と同時に送られてくる留学の手引き（ハンドブック）を参考にすると良いです。

以上の手続きと航空券の取得、さらに留学保険の加入申請が済んだら、あとは出発を待つのみです。ちなみに、2 月開始の場合、春節休み明けに向かうことになる都合上、航空券の値段が高騰します。これは後で知った情報ですが、天津経由で北京入りすると多少は安くなるようです。自分も日本への帰国の際は天津空港を利用しました。ただし、これは中国に初めて行く人などあまり地理に明るくない人はやらない方が良いかもしれません。

5. 留学時の身分と単位互換

教養学部の場合、この留学での身分は「休学」等ではなく「留学」の扱いとなります。選考結果の通知があり次第、教務課には留学届けを、国際交流支援係には渡航届けをそれぞれ提出しましょう。後述の単位互換の認定を受けるためには上記のプロセスが必須となります。なお、一時的に二重学籍の状態になることから、留学中も東大の授業の履修をすることはできます。私は学部 4 年生であり、卒業論文提出のために 4 S・A 通年で開講される授業（いわゆる卒論ゼミ）を形だけ履修登録する必要がありましたが、UTAS を通じてしっかり登録ができたので、もし今後 4 年時での留学を検討している人がいたら、参考にしてもらえればと思います。

単位互換について、本報告書を執筆中はまだ申請をしていませんが、過去（サマープログラム時）にも同様の申請を行った経験から述べると、教養学部に関しては手続きをしっかりと踏めば互換の認定をしてもらえることがほとんどです。概ね毎年 5 月と 11 月に申請の受付を行い、約 2 ヶ月後に申請結果が通知される形式でした。互換申請にあたり、互換したい単位を取得した授業のシラバスのコピーの提出を求められるので、Web シラバスや講義中に配られる紙シラバスをしっかりと保管しておきましょう。

6. 留学生活について

ここまでは留学にあたって必要となるであろう諸手続きを一通り紹介しました。読んでいただければわかるかもしれませんが、留学を通じて大変な部分は留学中よりもむしろ準備

の段階であることが往々にあります（私の周囲の留学経験者も多くがそう言います）。以下では項目を改めて、渡航後の話、すなわち授業以外の部分での留學生活について触れたいと思います。

まずは、最重要とも言える「住」にあたる寮について、キャンパス・アジアで留学した東大生はもれなく北京大学が用意する□□□□（中関新園）国際寮（外国人学生向け宿舎）に入ることになります。さらに外国人学生の中でも中国政府奨学金を受給している人達は5号楼という1つの建物に固まって住んでいました。建物の詳細を述べると、全部で12階あり、原則偶数階が男子、奇数階が女子という配置で、学部、修士生は必ず2人1部屋で居住します。室内にはベッド（リネン含む）、机兼書棚、椅子、簡易洗面所、テレビ、湯沸かし器、タンスが主に備え付けられており、それ以外必要なものは自分で調達するもしくはルームメイトから譲り受けるなどして確保しましょう。ちなみに、私はベネズエラから来ている修士1年生がルームメイトであり、彼の性格として穏やかかつハードワーカーであったことから刺激を受けつつ大変快適に留學生活を送ることができました。正直、お互いに部屋を空けていることが多かったことから日常的に会話を交わす程度で、どこかへ出かける等の深い付き合いはありませんでしたが、自分が到着して早々に物干し竿を譲ってくれるなど非常によくしてくれました。

上記に関連して、ルームメイトとの相性は留學生活においてとても大事だと思います。特に、これは私が帰国をする直前に判明したことですが、実は一緒に東大から行ったプログラムメンバーの中にルームメイトとの相性が合わず、割とストレスを溜め込んでいた人がいたので、彼に対し何もフォローできなかったことを少し悔いてしまいました。後で聞いた話ですが、寮のフロントに言えば部屋を変えるなど対処してもらえるようなので、本当に困ったらそういう手段に訴えるのも手かもしれないです。

最後に、寮の共用スペースについて触れておきます。各階には共用のトイレ、シャワー、大きな洗面台、洗濯乾燥機、キッチンがあり（常識的な範囲内で）24時間使用可能です。また、寮の2階にはカフェと図書館（兼ミーティングルーム）、近くの建物の1階にはコンビニ、地下にはジムや簡素な娯楽施設が揃っているので、極論すれば寮のある区域から一歩も出ずに1日を終えることもできたりします。もちろん課金制（10元/月）ではありませんが、全館Wifi完備です。各建物の玄関も全て顔認証システムでオートロックが解除される（かつ24時間警備員が駐在する）ようになっており、セキュリティも安心ですね。なお、部屋だけはカードキーで開くようになっているので、うっかりキーを部屋に閉じ込めたまま外出すると面倒な（別の建物にあるフロントに行く）ことになるので、お気をつけください。



□ 1 : □ の□□□□□□



□ 2 : □ の□□ (10□) からの□め

次に、「食」に関して。まず初めに、学食のバリエーション、安さの観点で東大と比べれば、正直言って北京大学の圧勝だと思います。ちなみに味は人によって評価が割れます。学内には7～8つの規模の異なる食堂があり、営業時間や形態も様々なので留学開始直後は色々回って、段々に行きつけを決めていくと良いです。2つだけ、私が頻繁に使っていた食堂の概要を紹介しておきます。

1) □□ (農園) 食堂

学内で最大規模の食堂です。3階建てで、学生が主に利用するのは1階と2階。1階

はビュッフェ形式でお皿をとって最後にまとめて会計する方式，2階はお店のブースがあって各店で注文、会計まで済ませる方式です。1000人以上を収容できますが，朝食7～9時、昼食11～13時、夕食17～19時と各食事時間のみしか営業していないためピークシフトしての利用が難しく，さらには教室棟が集中しているエリアの一角にあることから，特に昼食、夕食時は大変混雑します。営業開始直後や終了直前は比較的空いているので賢く利用したいです。なお，各階で持ち帰り用の容器と袋を販売しており，多くの料理はテイクアウトできたりもします。自分は一回も試さなかったのですが，利用している人も多く，人混みが嫌いな人には向いているかもしれません。価格は全食堂の中でも標準的で，概ね1食あたり10～15元には収まります。



□ 3 : □ □ □ の □ □ (□ □) □ □ □



□ 4 : とある □ の □ □ メニュー □

2) 学五食堂

中規模の食堂で、本科生用の寮が集まっているエリアの北側にあります。この食堂のメリットはほぼ全学食の中で唯一と言って良いほど9～21時半まで連続営業をしている点です。個人的には他の食堂の夕食の営業時間17～19時が早いと感じていたのですが、夜のコマ（18時40分～20時半）がある日の夕食はだいたいここを利用していました。方式は農園食堂の2階と同じです。価格も良心的で1品料理なら1食10元以内に収められます。



□ 5 : □ □ □ □ のメニュー □ □ (□ □ □ □)

食堂の会計は全て学生証（キャンパスカード）にチャージをする形で行います。チャージは学内に設置されている機械もしくはアリペイ（支付宝）のHPから可能です。ちなみに、キャンパスカードの利用は各食事時間（上述）ごとに30元までの上限が設定されており、累計でそれ以上の額を利用しようとするとう精算機械がパスワードを要求してきます。日本人の場合、パスワードは旅券番号の数字下6桁です。学食だけを利用する分にはまず上限には達しませんが、学内の一部ショップやコンビニでも学生証での支払いができる都合、もし要求された時のために覚えておいて損はないでしょう。私は、4月上旬に上記の出来事に遭遇するまで、パスワードが何なのかすら知らずその際少し困りました。

大抵の1日3（たまに2）食は、このように学食で済ませていましたが、もちろんそれ以外にも手段は多くあります。代表的な方法を3つ紹介します。1つ目は、もはやモバイル決済と並んで中国現代都市生活の代名詞とも言える「外卖（外卖）」です。根源の意味は文字通りテイクアウトですが、専ら（バイクを使用した）デリバリーサービスに対して使われます。学食に比べれば20～40元と値は多少張りますが、周辺カフェ、レストランの料理を寮の玄関まで持ってきてくれるのは大変便利です。□ □ □、□ □ □ □ など多くの

アプリが競ってサービスを提供しているので、中国留学の話のネタとしても一回ぐらい使っておきたいものです。とは言いつつ、自分は学期を通じて片手で数えられるくらいしか利用しませんでした。その辺は人の好みかもしれません。そして、2つ目は普通にレストランに入って外食をすることです。北京大学の近くには徒歩圏内で□□□（中関村）、五道口といったいわゆるショッピングエリアがあるので、飲食店街も集中しています。キャンパス・アジア（+USTEP）の東大メンバーとは月1程度で集まって近況報告、情報共有などをしていましたが、その際は外食をすることが多かったです。最後は、寮のキッチンで自炊することです。ただし、調理器具は自前で調達しなければなりませんし、食材をキープするための冷蔵庫等も必要になるので同期のメンバーでこれをやっていた人は流石にいませんでした。



□ 6 : □ □ で □ □ □ の □ □

次に、日用品その他諸々の買い物に関して。基本的に学内にスーパー、コンビニ（ファミリーマートなど）、カフェ、果物屋、文房具店、印刷屋、床屋、書店、クリーニング店、携帯ショップ、銀行ATMなどは揃っているので、安さや質を追求したり、家電など大型のものを買ったりしない限りは十分に生きていけます。この中で、到着して早々にお世話になるのは、おそらく携帯ショップと銀行（中国銀行）です。SIMカードの契約（あるいは携帯端末ごと購入）と政府奨学金受給のための銀行口座開設は到着してすぐにでも行いましょう。さもなければ、留学期間において“健康で文化的な最低限度の生活”を維持することが難しくなります。とにかく日本よりも遥かにモバイル決済が浸透したこの国においては、先述の2つがないとストレスフリーな生活を送ることが難しいのです。私も北京入りした翌日に、中国語も覚束ず、右も左もわからない状態で端末、SIMカードの購入と口座開設に向かいました。結局、身振り手振りを交えるなどして何とか一人でも対処

できはしましたが、できれば事前に北京大学の知り合いをつくってサポートを求めるのが理想的かもしれません。

最後に、ある程度北京での生活にも慣れたら、色々市内を探検したくなるでしょう。ぜひ北京の色々な街を実際に訪れて、雰囲気の違いを感じてみることをお勧めします。地下鉄初乗りは3元、バスは2元、シェアサイクルは利用料だけなら1元からと交通機関のバラエティと安さには目を見張るものがあります。バスは頻繁に渋滞に巻き込まれるので推奨はしませんが、また、街の至るところに監視カメラが設置されており、地下鉄も必ず乗車前に手荷物検査を通し、さらに車内には保安官までいるので、都市部での重大犯罪の発生率で比較すると感覚としては日本と大差ないはずです。夜間であろうと軽犯罪や行くエリアにさえ気をつければ普通に外出もできます。加えて、水道水は絶対に飲まずミネラルウォーター（500mlで概ね1.5～3元）を面倒でも購入すること、屋台で購入する料理は衛生面をよくチェックすること、不用意に道路を横断しない（車やバイクが絶対に止まってくれると思込まない）こと、タクシーを使うときは配車アプリ（□□など）で呼ぶか流しならば正規のタクシーを捕まえ、白タクには乗らないことなどをしっかりと用心すれば向こうで公安（警察）や病院のやっかいになることはまずないでしょう。この辺は東南アジア諸国を周遊していた経験が個人的には役立ちました。留学期間の北京の気候に関して言えば、現地到着直後の2月は1日の平均最高気温が0～5℃、最低気温が-10～0℃で、同時期の札幌や長野に行く格好を想定してもらえればと思います。そう考えるとダウンは必須ですね。一方、帰国直前の6月は1日の平均最高気温が30～35℃、最低気温が15～20℃と、昼間は部屋の冷房をつけなくては暑苦しい状況になります。なお、1学期を通じて1日中雨が降ったのは10日もなかったです。このように東京と比べて1日、季節間どちらの気温差も大きいことから、服は満遍なく持参するか、冬服をメインに持っていき夏服を現地調達する、あるいは日本から家族に国際郵便で送ってもらうなどの対応策を事前に検討しておきましょう。また、典型的な日本人がイメージする中国の大気汚染について、実際に生活をした経験を踏まえると、「日本よりは間違いなく悪いけど、想像していたほどではないな」というのが率直な感想です。それは、確かに数年前に比べれば格段に状況は改善しつつあることが背景にありますし、よほど敏感な人でない限り、マスクをするなどある程度の自己防護策を加えた上であれば直ちに身体に深刻な影響が及ぶといったことはないと思われます。当然、澄み渡った青空が拝める日もたまにあるので、その辺は自分の身体と相談して対応を決めてください。

以上、ここまでかなり長くなってしまいましたが、留学に関する基礎情報編として、個人の紹介から留学に関する諸手続の概要、生活情報の諸々に至るまで様々記述しまし

た。ここに記載した情報も、私個人の見方に偏った内容が多いと思われるので、もちろんこの報告書の内容だけではなく他の北京大学（あるいは中国）留学経験者の報告書やブログ記事、『地球の歩き方』をはじめとするお役立ち系ガイドブックなど様々な媒体を参考にして充実した留学生活をお過ごしください。これは個人で勝手に納得していることですが、留学含め海外での生活は至極情報戦である気がします。QOLを向上させ続けるためにも常に全方位にアンテナを張っておきたいです。次章では講義編として、特に北京大学の授業や学習環境、学生の雰囲気に関心を持った内容をお伝えします。

II 北京大学における学習環境

この章では、私が北京大学において履修した講義を中心として、学内の学習環境、さらには授業外での学びについても触れたいと思います。前提として、北京大学では母語である中国語と、英語での講義がそれぞれ行われています。しかし、英語での講義数は多くはなく、ある程度の中国語力（第二外国語として選択し、後期課程でも継続して学習を続けたレベル）が担保されているのならば、中国語の講義を軸に受講していく方が個人的にはオススメです。自分は4科目（期末試験に出席し、単位取得まで確認したのは3科目）すべて中国語の授業を履修、期末試験までありましたが、現地でのあらゆる学習は特に作文を中心とした中国語力の向上に大変寄与してくれました。実際に、帰国直後の2019年6月中旬に受験したHSK（6級）では、総合点208点（300点満点で6割以上がいわゆる合格基準）、その中でも□□（作文試験）は91点（100点満点）と、総合点だけで見ればまだまだ至らないところも多いですが、文章にして自分の意見を述べていくことに関しては困らないぐらいにはなりました。来学期（4Aセメスター）は、キャンパス・アジアで北京大学から東大に留学してくる留学生2名のアシスタントを務めることに決まったので、その学生達との交流を軸に、引き続き総合的な中国語力を高めていくつもりです。

1. 履修成績関連情報および講義形式

詳しくは留学の手引きや北京大学の留学生向けHPにも記載がありますが、事前に知っておいた方が良かったと個人的に思う情報について記述します。

まず、シラバス公開から履修登録、成績確認までの一連の流れは、東大同様に全て大学の学務システム上で行われます。特に、履修登録については手続きの期日がしっかり決まっていますので、案内をこまめにチェックして漏れのないようにしたいです。履修登録期間は授業開始直前から学期の第2週目まであり、その間は東大と同じくいわゆるお試し期間にあたります。そのため初週は色々な講義に顔を出し、相性の良い教授や講義を見つける

ようにしました。東大と唯一異なるのは、ほぼ全ての講義で履修定員が定められており、定員を上回る履修希望者が出た場合、抽選が行われるという点です。抽選が行われやすい講義の種類としては、英語で行われる授業や「□□□（通選課）」という日本の大学でいう一般教養科目にあたる授業が多いかと思われます。なお、キャンパス・アジアで留学をすると、元培学院という学部には所属しますが、ここではほぼ全ての講義を優先的に履修できる配慮がなされる反面、対外漢語学院という専ら中国語のみを学ぶ学部の講義を履修することはできないので、中国語力の向上を最優先の目標にしたい方はこのプログラムでの留学は向かないかもしれないことを付言しておきます。

授業の形式について、私は全て履修者が40～200人程度の比較的人数の多い講義ばかり受講していたので、一概に述べることはできませんが、教授が教壇に立って一方通行的な授業を展開しつつ時々たまに学生達に質問を投げかけるという点において東大とほとんど変わらないのではないかと思います。成績評価も様々で、出席確認の有無、中間試験の実施、レポートの分量は各講義によって大きく異なります。学生の受講態度も、大半の人はパソコンを開いて講義ノートを作成し、教室の後方では瞑想にふける人、スマホの画面を横にして動画の視聴やゲームに夢中になる人も（さすがにごく一部ではありますが）いる光景は、「大学生って国は違えどこんなものなのかな？」と勝手に思ってしまう。もちろん誤解を恐れずにいうと、（中国を含め）たった数カ国の大学生を観察した結果の極めて個人的な判断でしかありませんし、授業外の学習において北京大学の学生達は東大生よりも総じて遥かに熱心です。また、個人的に東大と違って便利だと感じたことは、授業ごとにWeChat（中国のコミュニケーションアプリ）のグループがあり、教授やTAもメンバーとして入っているので、気軽に質問をすることができたり、受講生間の交流が活発に行われていたりする点です。中国の学校では呼びかけも含め「□□」という言葉が良く使われますが、まさに上記の現象は教授陣と受講生達が一体となって学んでいくという姿勢を強く感じました。

最後に、成績と留学生の履修要件について触れておきます。キャンパス・アジアで留学すると、北京大学では「普通進修生（普通進修生）」という学位取得を目的としない留学生として扱われます。これらの学生は一律毎学期6単位以上の履修が要件として課せられるので、1週間あたり2コマ（50分×2）の授業で3科目、3コマ（50分×3）の授業で2科目以上の履修が必須です。中国語の講義のみを履修するのであれば、8～12単位程度に収めた方が課外学習やプライベートの時間も確保できて良いのではないかと思います。履修科目の成績確認について、東大のように一律の成績発表日というものではなく、成績入力完了次第、学務システム上で順次点数と単位取得の可否がわかります。自分の場合、2019年6月下旬（学期終了から概ね2週間）には全ての科目の成績が判明しまし

た．単位取得の厳しさは教授の性格に依存することが多いので，何とも言えない部分がありますが，もちろん我々は中国語がネイティブというわけではありませんし，きちんと講義に出席し試験勉強もした上で期末試験に臨めば，まず単位を落とすことはないはずで
す．

2. 学習環境と学生の雰囲気

前節の講義形式の部分でも言及しましたが，課外での北京大生は総じてハードワーカーである印象を個人的にかなり受けました．ただし，それは学習環境の充実度合いによって実現された部分も大きいと思われ，地理学的な言い方をすれば，空間構造そのものが人間行動のあり方を規定しているということになります．



□ 7 : □ □ □ □ の □ □ □ □ (22 □ □) の □ □ □ □ にて

具体的には，本科生を含めて学生は原則学内の寮に住むことを求められ，前章の生活環境の部分でも触れた通り，生活に必要な用事は学内で済ませることができることから，外界と多く行き来をする必要はありません．数名の本科生に聞いただけの感覚ですが，おそらく東大生のようにアルバイトに励んでいる人は皆無なのではないかと思います（その分だけ就業前のインターンシップは多いです）．図書館も早朝から深夜まで開いていることに加え，それぞれの教室棟の廊下部分にも自習用のフリースペースが備わり，夜も 22 時

半まで開館していることも相まって試験期間前のみならず常時自習をする学生の姿が目立ちます。自分もこれに触発されたのか、特に試験期間前は教室棟の空き教室や自習スペースに閉館まで籠る生活を続けていました。大変に恥ずかしいことではありますが、学部4年にして初めて学問に真摯に向き合うことができた気がします。

反面、閉鎖的な空間で一定の長い期間生活を送ることは、将来国家のリーダーとなっていくであろう学生達にとってどれほどプラスになるであろう、といった疑問符もつきまします。しかし、これは別の観点で東大も変わらないのではないかというのが個人的な見解です。特に、東大の学部生が首都圏出身の人達でその多くを占められている一方、北京大学は確かに北京出身の学生もいることにはいますが、その多くがああ広い国土の各地から集ってきたエリートによって構成されているのです。その意味において、北京大学は一見すると特定の方向に向かってるように見えて、多様性に満ち溢れているとも言えます。このように、日本と中国のどちらの大学生の生活様式や外界との接し方が良いかという優劣をつけることは無論できませんが、“一衣帯水にありながら宇宙よりも遠いかもしれないぐらいに異なる”という私自身の見方を補強する材料の一つにはなりました。

3. 履修した授業について

□ 1 : □ □ □ □ での □ □ □ □ □ □

| 科目名 | 開講学部 | 曜日 | 時限 | 言語 | 人数規模 | 素点 |
|-----------|--------|----|-------|-----|------|----|
| 都市経済学 | 都市環境学院 | 月 | 5～6 | 中国語 | 50人 | - |
| アメリカ文化と社会 | 国際関係学院 | 月 | 10～11 | 〃 | 180人 | 71 |
| 経済社会学 | 社会学系 | 水 | 5～6 | 〃 | 50人 | 66 |
| 日本経済 | 政府管理学院 | 水 | 10～11 | 〃 | 200人 | 80 |

続いては、私が留学中に履修した授業について、具体的に講義の内容や感想を述べたいと思います。個人的には「東アジアを中心とする国際関係の理解を深める」という軸で講義選択を行なっていったので、表の通り選んだ講義の開講学部が全て異なる結果となりました。東大にも学部ごとの雰囲気なんとなく存在するように、北京大学もやはりそのような傾向はある気がします。そのため、せっかくほぼ全ての講義を優先的に履修することができる学部にいるのだから、色々な学部の授業をつまみ食いしていてもいいのもオススメです。

1) 都市経済学 (□□□□□)

東大の方ですでに「都市地理学」の講義を履修していた関係で、教授手法の違いを感じながら授業を受けることができました。内容としては、原著が英語で書かれた都市経済学の中国語訳版のテキストを1学期間で読み通すといったもので、正直「教科書読めばある程度わかる系の授業だな」と思ってしまった節はあります。しかし、時々教授が都市経済学の理論と現実の中国都市問題とを結びつけて話をする部分もあり、その点は大変興味深かったです。成績評価はそれぞれ3000字の中間、期末レポートの提出ならびに期末試験によって行われていました。



□ 8 : □□□□□ の□□□□□□□

2) アメリカ文化と社会 (□□□□□□□)

国際関係学院が開講するオムニバス形式の講義です。北京大学の各学部や中国科学院から教授、研究者が毎回1名ずつやって来て、アメリカの歴史、民族問題、政治経済、メディア、文学、宗教、中米関係などの各テーマについて概説するスタイルでした。米中の貿易戦争が激化する中、アメリカという国を中国がどのように捉えているかについて、日本に在るだけで得られる情報は非常に限定的でしょう。ゆえに、中国の知識層の、我々が思う以上に極めて客観かつ多面的にアメリカを理解しようとする姿勢を感じ取ったとき、現代日本人のどれほどがある特定の外国への深い理解を試みているかについて疑問符をつけざるを得なくなりました。なお、成績評価は2000字の読書レポートおよび全問論述式の期末試験で行われました。



□ 9 : アメリカ□□と□□の□□□□□□

3) 経済社会学 (□□□□□)

交差的な学問分野（経済地理学や環境社会学など）が好きな自分にとっては、講義題目を発見したその瞬間に履修を決めたいくなるような講義でした。実際、学部レベルで東大には同様の名前の講義はないのではないかと思います。今まで経済学を空間的な視点から捉えたことはあっても、社会制度や企業経営、個人行動の観点から捉えるような内容を今回初めて学んだことで、改めて理屈のみでは表現できない人間社会の面白さについて学術的な目線で再構築をすることができました。成績評価は期末試験一発で行われたためどの科目よりも緊張しましたが、何とか乗り切ることができてよかったです。



□ 10 : □□□□□の□□□□□□

4) 日本経済 (□□□□)

「日本人が自国の経済を学ぶような授業を履修してどうするんだ！」と思われるかもしれませんが、ここに中国からの視点，という状況が加わるとそんな批判も一蹴されてしまうでしょう。教授は名古屋大学で博士号を取得しており，戦後の日本経済の成長の特質をマクロからミクロまで詳細に解説するような内容は，2) アメリカ文化と社会でも述べた通り，中国の知識層は思う以上に一つの外国を極めて客観かつ多面的に分析する姿勢を示すそのものであると感じました。授業の最終回では，私が冒頭に述べた「1世紀ごとに発生する，世界の中心の西回り転換論」について教授が触れており，これからの東アジア経済（特に，日中関係）のあり方を改めて考えさせられました。成績評価は択一式の中間試験と論述式の期末試験の2本立てで行われました。TAも日本経済を専攻している院生が中心なので，数ある授業の中でも特に留学生へのフォローは手厚いと思います。



□ 11 : □□□□ の□□□□□□□

4. 課外活動

最後に，大学外でも中国についてより深く知る機会を得られたので，その中でも日本語の語学学校に通う学生達との交流，ならびに2019年3月に行われた北京東大校友会プログラムを通じての北京在中国日本大使館訪問の2点について記述したいと思います。

第一に，日本語を学ぶ中国人達との交流です。北京には学内外問わず，日中交流会に関する組織が多くあります。大概は北京大学の日本人学生会 We Chat グループに活動案内が流れてくるので，各運営者にコンタクトをとれば，組織への加入，活動への参加等が可能となります。組織の活動頻度や運営形態も様々であるので，最初はこちらも授業と同じくお試し程度にいくつか覗いてみるのも悪くないでしょう。もちろん，可能ならば本科

生と同じようなサークル活動(□□□□)に参加した方が、中国人学生との交流の幅が広がっていくことは間違いないと思います。ちなみに、私が参加をした日中交流会の組織の活動についてですが、月一回程度集まり、お互いに言語を教えあうといった内容が主でした。学内では大人数の講義ばかりを履修していてなかなかスピーキングを磨く機会に恵まれなかったこともあり、こうした場は大変貴重でした。

第二に、北京東大校友会プログラム(体験活動プログラム)への一部参加についてです。2019年3月中旬頃に、2週間程度の日程で北京、上海を訪問していた体験活動プログラムの学生達に混ぜてもらい、□□□□(ByteDance、TikTokに代表されるアプリを運営する企業です)と北京在中国日本大使館の訪問をしました。大使館では、横井大使とお話をする機会があり、「自分は中国と25年以上関わりがあるが、それでもまだ中国という国を完全には理解できていない」といった内容のお言葉を頂いたことが非常に印象深かったです。



□ 12 : □□□□□□□□ , □□□□ との□□□□ (□□□□□□のためボカシ□み)

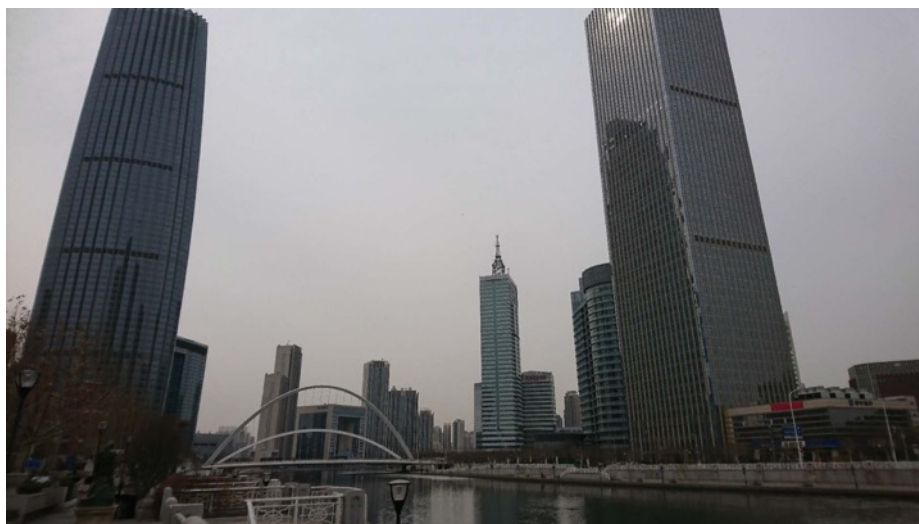
Ⅲ 留学中の旅行

もちろん、留学における第一の使命は派遣先大学での学びを充実させることにありますが、せっかく中国国内にいるのだから北京にとどまらない中国の様々な“顔”を自分の足で見聞するのも大事だと個人的には思います。滞在期間が4ヶ月程度とあまり長くはなかったですし、自分が初の中国訪問であったことも相まってメジャーな都市ばかりいく形に

はなりましたが、各都市に生きる人々の行動、マナー、考え方、普通話の発音などの細かな差異を少しでも感じることは非常に良かったです。以下、旅行の目的やそこで感じたことについて、旅行記にならない程度に簡単に記述できればと思います。

1. 天津（2月下旬/日帰り）

北京から旅行しやすい都市の筆頭です。高速鉄道に乗れば30分程度で着くので日帰りも簡単にできます。かつての租界地時代の街並みを見る目的が主でしたが、北京と同じ直轄地でありながら、首都とは違い（体感的に）ゆったりとした時間が流れているのが印象的でした。



□ 13 : □ □ □ □ □ □ の □ □ ビル □

2. 瀋陽・大連（3月上旬/2泊3日）

水曜の授業が終わった後の夜行で東北地方に向かいました。ちなみに、夜行を使えば旅費を節約できたり、もはや日本では味わえないような旅情を感じられたりするので、大変オススメです。最大の目的は司馬遼太郎著『坂の上の雲』でも登場する、日露戦争最大の激戦地となった旅順・二〇三高地を訪れることでした。私が行ったのがちょうど冬も終わりがけの比較的寒い時期であったからかもしれませんが、自分以外の観光客は皆無で、歴史にゆっくりと思いを馳せることができたと思います。東北地方は比較的中国都市経済の発展から取り残されがちというイメージが強かったですが、大連をはじめ高層ビルの建設ラッシュが巻き起こっており、またいつか再訪するのが楽しみになりました。



□ 14 : □ □ □ □ □ □ □ にて

3. 上海（3月下旬/3泊4日）

木曜から日曜にかけてはいっさい授業をとっていなかったなので、その休みを活用し高速鉄道に4時間ほど揺られ、北京と並ぶ中国の巨大都市、上海に向かいました。ちょうどアニメ『ラブライブ！サンシャイン!!』の声優ユニット Aqours のアジアツアー上海公演が開催されるタイミングに併せたのが正直な目的です。もちろん□□の夜景や高層ビル群なども見応えがあったのですが、一番は件のライブの中で周囲の席の中国人ファンと交流し、今も継続的に連絡をとるようになったことです。月並みなコメントではありますが、彼ら彼女らの日本のコンテンツに対する造詣の深さには感服するものがありましたし、逆に自分もさらに自信を持ってアピールできるぐらいには、日本のコンテンツについても様々な知識を身につけていかなければならないと思いました。



□ 15 : □ □ □ □ □ の □ □

4. 西安（4月下旬/3泊4日）

労働節の休みで混雑をする直前に行きました。西安はかつての唐の都長安として、遣唐使の最終目的地ともなっていた場所です。短いながらも中国で学ぶ一人の日本人として、訪れなければならないという謎の義務感を抱いていたことによります。兵馬俑や華山といった定番の観光地もまわりましたが、一番印象に残っているのは青龍寺で空海の記念碑を眺めたことです。ちょうど学期半ばで全て期末試験のある授業を履修していたことにプレッシャーを感じ、また後悔も少ししていた時期ではあったのですが、先人達の努力の痕跡に触れたことで、残りの留学期間を乗り切るためのモチベーションを得られた気がします。



□ 16 : □ □ のイスラム □ (□ □ □) にて

IV 雑多な情報

ここまでで私個人の留学経験に基づいた報告は終わりなのですが、最後に考察や今後の展望を語るためのつなぎとして、2週間～1ヶ月程度の短期留学と今回の留学との比較、留学と就職活動の両立についての二点だけお話できればと思います。

1. サマープログラムとキャンパス・アジアの違い

それは留学期間が違うから、得られるのものが違いますよね、と言ってしまうとそこで終わりなのですが、実際問題国際経験に乏しかった自分のような人間が留学プログラムを考えると、長期休み程度で完結するような短期のプログラムか、あるいは1学期、1年と派遣先の大学で腰を据えて学ぶような中長期の留学のどちらを初手に選ぶかは重要だと思います。もちろん明確に自分の意思を持って決断できるのならば問題のないことではありますが、冒頭にも述べた通り、私の場合インドネシアでの経験が今回の留学の動機の一部につながったことは間違いありません。その意味において、最初にサマープログラムに参加したことはとても良い選択であったと今でも思っています。もしそうでなければ自分の場合、あっさり心が折れていたことでしょう。一方で、インドネシアで広がった視野の広さを1としたとき、今回北京の留学で得られたのはその10倍も100倍もあったかもしれません。国が変わっているので一概には比べきれない部分もありますが、単純な日数の掛け算以上の開きは間違いなく存在します。結局は、自分のキャパシティと得たい知見を天秤にかけて、どちらを初手として選ぶか決めざるを得ないとも言えます。

先述のような差が生じるのも、行動の制約がかかっているかそうでないかは大きな要因としてあるでしょう。この報告書を書いている今でも、帰国して様々な人から北京大学での留学の感想を求められることがあります。たいてい「一寸先は闇のような生活だった」と答えるようにしています。それは、良い悪い両方の意味においてです。基本的に短期プログラムとは違って、1日3食の食事を誰とどこでとるか、週末は誰とどこにどうやって出かけるか、どの授業を受けるかなどは自分の意思の下に決められる一方、その行為の選択によって生じた結果についても全て自分で負わなければなりません。しかも、生まれ育った土地ではない以上、その結果がいつもより見通しにくいことだって往々にしてあります。留學生活は基本楽しいですが、4ヶ月しかいなかった私でさえ、もどかしい思いをしたことも現に何回かはありました。その原因はさまざまです。1年の留学を選んだメンバーはなおのことそうでしょう。留学が終わり全てを振り返ったとき（まさにこの報告書を書いている時もそうかもしれません）、それらの思い出を美化できるのは、生活の中

でスリルをどれだけ楽しめたかに依拠する部分も大きいと個人的には思います。

2. 留学と就職活動の両立

新卒一括採用がいまだに根強い日本において、日系企業への就職を念頭においているならば、中長期の留学による就職活動への影響については無視できないでしょう。確かに、今では海外での新卒採用選考や Skype 等オンライン通話による面接を行なっている企業もありますが、全体で見ればまだまだ少数です。北京は日本からも近く、首都であるがゆえに日本人就活生同士の交流会なる組織も存在しますが、享受できる情報量で見れば、日本国内より劣るのは当然です。ましてや、4年生が S セメスター期間に留学した場合、帰国できるのは早くても6月中旬で、春選考に参加することは事実上不可能、夏秋選考はできたとしても就職したい業界、企業がその中にあるとは限らないというのが実情です。

このように、民間企業の就職活動を進めながら 4 S セメスターに留学をし、そのまま4年で卒業するというのはなかなか至難の技で、現実的に卒業を1年遅らせることも選択肢としては多く取られますし、そもそも1学期のみの留学であれば2、3年時に行ってしまった方がリスクを減らせます。ただし（この報告書を読んでいる方の中に該当者がどれほどいるかわかりませんが）、公務員（特に、国家公務員）志望で、試験にも既に合格をし、大学の単位もある程度取得している等比較的時間的に余裕があるのならば、仮に 4 S セメスターであっても就職活動のことは全く無視をした上で、留学に集中できるのではないかと思います。結局、万人に共通するアドバイスのようなものは恐らく存在しないのですが、民間、公務員問わず説明会、インターン等の参加に影響が及ぶのは確実に言えるので、気になる方は留学前からある程度両立のための計画も立てておいたほうが良いです。

V これから中国とどう関わるか

最後に考察に代え、1学期間の留學生活で私が捉えた中国の一面的な“像”に関して、これからの自分の行く末とも絡めて書きたいと思います。とはいえ前提としてそれを語るのに、多くの過去のキャンパス・アジアプログラム参加者（先人）達も報告書内で言及していますが、「中国という国は～（あるいは中国人は～）である」といった表現法を用いるのはあまりにも愚かだと自分も感じます。それは、日本人の中でも中国通のトップたる横井大使の先のご発言にも裏付けられることでしょう。

すなわち、例えば以下中国の統治機構、中国人の行動様式・思考法などについて様々記述することはできますが、ネット上にも掲載されるオフィシャルな留学報告書として自分の見解を垂れ流し続けるのが適切だとは私は思いません。それを広く一般に語れるほどに

自分は中国を理解したとは到底言えないからです。ただ一つだけ、その“像”を見通すためには、中国国内のみならず、世界中に散りばめられたピースを一つ一つ集め、頭の中で構築していく必要があることはわかりました。しかし、その全てを構築した上で“像”を見通すのは自分の残りの人生をかけてもまず無理でしょう。

ただし、自分は中国に対する混沌とした感情を放っておくことはできません。その意味において、社会人になるこれからも多面的に中国と関わり続けるつもりです。既にこの報告書を記述している時点で次の進路は決まりましたが、幸いにも上述の思いを達成できるような入り口を選ぶことができました。まだまだ遠い未来ですが、可能であれば20代のうちに再度中国の大学院に留学をし、いずれは北京の在外公館や中国の他の都市の領事館で働けることを勝手に夢見ています。そうすれば、この考察部分も今より少しはマシな内容が書けるようになっているはず。

おわりに

以上、キャンパス・アジアプログラムについての概要から北京大学での留学生活、今後の展望に至るまで、私のこの度の留学生活の区切りとして記述してきました。乱文乱筆にての記述にも関わらず、ここまでお読みいただいたことに御礼申し上げます。

最後に、漏れがあってはいけないのでいちいち名前を挙げることは控えますが、私を北京大学へと送り出してくれた EALAI の事務局および先生方、学内でサポートいただいた学友・教授陣、ならびに学外を中心に今回の留学で出会った多くの方々、そして4年で北京大学に留学すると突然言いだしたにも関わらず、何一つ文句も言わず見守ってくれた家族をはじめとする多くの人々の助けに、末筆ながら心から感謝申し上げたいと思います。



2019年3月 〇の〇れを〇じる〇〇〇〇〇〇にて